

2024年度

愛知の自治的諸活動と生活指導

(第60集)

目次

I はじめに	2
II 本年度の研究活動	2
III 研究の内容 (実践研究事例)	3
小学校3年生 友達と楽しく関わることのできる児童の育成	
中学校1年生 前向きな気持ちで行動することができる生徒の育成	
中学校1年生 課題を自分事として捉え、他者と協働し、よりよい学級をめざす生徒の育成	
IV おわりに	25
1 明らかになったこと	25
2 来年度への課題	25

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員会 自治的諸活動と生活指導部会

2024年度 教育課程研究委員

ブロック推薦

◎部長 ○副部長

名古屋			尾張			三河		
名前	単組	分会	名前	単組	分会	名前	単組	分会
○大橋 史人	名古屋	明治小	○萩原 賢太郎	稲沢	祖父江中	◎神谷 淳一	碧海	高浜中
糟谷 聡宏	名古屋	黒石小	岡戸 信輔	知教連	加木屋南小	小野 覚	豊田	童子山小

第71～73次教育研究全国集会レポート提出者

第71次			第72次			第73次		
名前	単組	分会	名前	単組	分会	名前	単組	分会
松下 裕哉	名古屋	千鳥小	竹田 裕亮	海部	立田南部小	日比野 佑哉	名古屋	岩塚小
蟹江 陽平	岡崎	男川小	皆川 博之	名古屋	名塚中	足立 昌洋	安城	東山中

第74次教育研究全国集会レポート提出者 今枝 真基 (一宮・千秋東小分会)
清水 翔太 (豊田・竜神中分会)

I はじめに

本部会では、子どもたちが周りの仲間との間に良好な人間関係を築き、互いに意見を出し合ったり、教え合ったりする中で、どんなことにも意欲的に取り組むことができる力を身につけることをめざして実践にとりくんできた。こうした実践は、子どもたちが学力的な「基礎・基本」を身につけるための土台になっているのではないかと考える。また、本部会では、これまでに「複雑・多様化している現代社会の中で、たくましく生きていく力を育てる」という生活指導の方向性を確立してきた。そして、次のような目標を掲げ、教育研究活動にとりくんできた。

- 複雑・多様化している現代社会の中で、主体的に生きていく力を育てること。
- 集団の中で、民主的行動力を養い、社会性を育て、自治能力を育てること。
- 協働する力を深めながら、一人ひとりの人間としての尊厳を学びとらせること。

しかし、子どもたちをとりまく状況は、複雑・多様化し、厳しさを増している。その中で、子どもたちの心は大きく揺れ動いている。積極的に周りの子とかかわることができない子、友だちへの気遣いや優しさをうまく表現できない子、素直に人の話が聞けない子のように、よりよい人間関係づくりを苦手に行っている子どもが増えているように感じる。それに加えて、暴力的手法で相手を傷つけたり、スマートフォンやSNSの普及により匿名で他人を誹謗中傷したりするなどのいじめや、長期欠席についても、昨今大きな課題として残されている。

わたくしたち教員は、学校集団生活での不適応に起因するさまざまな諸問題について、全力で解決していかななくてはならない。そのためには、優しい心、認め合う心、感動する心を子どもたちにもたせ、たくましく生きていく力を身につけさせることが大切である。そして、悩み苦しんでいる子どもたちの気持ちを真剣に受け止め、子どもたちが抱えている問題やその背景にあるものを正しく理解し、支援していかなければならない。

具体的には、わたくしたち教員は、まず、子どもたちと確かな信頼関係を築かなければならない。その上で、子どもたち一人ひとりのよさを認め、子どもたちが集団の中で「自分は役に立っている」「必要とされている」という気持ちを味わうことができるようにすること、家庭や地域との連携を深めること、子どもたちの心に、周りの人に対する優しさや、思いやりの気持ちを育むことなどが大切であると考えます。

本年度は、着実な実践の積み重ねから生まれた成果とこれからの課題を話し合い、「たくましく生きる子どもを育てよう」をテーマに実践にとりくんだ。

II 本年度の研究活動

- 2024. 4. 24 教育課程研究委員全体会〈名古屋サンスカイルーム〉
本年度の研究主題「たくましく生きる子どもを育てよう」の決定
- 2024. 9. 10 第1回部会〈当会労働金庫本店・別館第8会議室〉
研究主題に沿って、小中学校それぞれの研究の3つの柱の確認
研究の3つの柱の確認と県教研分科会のすすめ方を検討
- 2024. 10. 10 第2回部会〈県教育会館〉
県教研分科会の具体的なすすめ方や当日の発表・討論のあり方を検討
- 2024. 10. 19 第74次教育研究愛知県集会〈愛知県産業労働センター〉
- 2024. 2. 18 第3回部会〈県教育会館〉
本年度の研究のまとめ

Ⅲ 研究の内容

第 74 次教育研究愛知県集会にむけて

「たくましく生きる子どもを育てよう」の統一テーマをもとに、多数のリポートが提出された。

【小学校部会】リポート数 15 本

課題

- (1) 子どもの気持ちを大切にし、実態を把握したうえで、よりよい人間関係を築くためにどのような活動を展開していくのか。
- (2) 心理的な背景や発達段階をふまえ、子どもたち一人ひとりをどのように理解し、支援していくのか。
- (3) どのようにして、集団の質を高めていくのか。

課題(1)にかかわるものとして、友だちのよいところを見つけ合う温かみのある学級づくりや異学年交流活動などを通して、よりよい人間関係を構築し、お互いを認め合ったり、自己肯定感を高めたりするリポートが報告された。

課題(2)にかかわるものとして、認め合い活動や話し合い活動の工夫によって、温かい人間関係をつくり上げていった実践が報告された。また、問題を抱える子どもたちに対し、個々に応じて適切に支援し、自己有用感を高めることをめざしていくリポートも報告された。

課題(3)にかかわるものとしては、子どもたちが中心となって話し合い、活動の立案・実行までをしっかりと行うことができるよう、教員による支援をどのようにしていくのかを明確にしたリポートも報告された。

提出されたリポートから、以下のことについての必要性が確認された。

- (1) 望ましい集団をつくるために、どのような活動を展開していくのか。
- (2) 活発な話し合いのための支援をどのようにしていくのか。
- (3) どのような目標設定のあり方がよいのか。また、活動の振り返りをどのように生活にいかしていくのか。

【中学校部会】リポート数 9 本

課題

- (1) 子どもの気持ちを大切にし、実態を把握した上で、やる気を引き出し、自己存在感を味わわせるための支援のあり方。
- (2) リーダーの育成や集団の質を高めるための支援のあり方。
- (3) 問題行動の解決や予防のための家庭や地域との連携、コミュニケーション能力の成とその支援のあり方。

子どもたちの自己存在感を味わわせるための支援のあり方では、協力的・参加的・体験的な活動を学校生活の中に取り組み、その中で個や集団の課題を認識し、解決していこうとする集団づくりが大切であるという意見が出された。また、子ども主体で学校行事を実施することは、成功が担保されているわけではないため、失敗をする可能性もあるが、子どもに成功体験を味わわせたいがために教員が指示しすぎる可能性もあるので、教員側がどこまで関与するか判断が非常に難しいという意見もあり、有意義な討論がなされた。

集団の質を高める支援のあり方では、子どもたちどうしが問題を共有した上で、その解決にむけて話し合い、実践する取り組みを続けていくことにより、力を合わせて解決しようとする子どもの育成について話し合われた。また、学級力アンケートによって学級の実態を把

握し、PDCAサイクルを学級活動に組み込み、次のステップに自分の意見が反映される経験を積む中で、子どもたちに自己存在感を味わわせることの大切さなどが話し合われた。

問題行動の解決や予防のための家庭や地域との連携、コミュニケーション能力の育成とその支援のあり方では、安心して安全な風土、コミュニケーションスキル、ソーシャルスキルなどの言葉が多く出された。自他を大切にすることの重要性が話し合われた。また、長期欠席の子どもの自立をめざした支援の実践が報告された。

提出されたりポートから、以下のことについて確認された。

- (1) 自他のよさに気付き、そのよさをいかして活動できる場や時間を確保して、子どもたちの自己存在感や自己有用感を育むための支援のあり方。
- (2) リーダーの育成や集団づくりの中で子どもたちの主体性を育てたり、縦割り活動をいかながら集団の質を高めたりする支援のあり方。
- (3) 問題行動の解決や予防のために、学校・家庭・地域のつながりを深める支援のあり方や、関係諸機関と連携して、子どもたち一人ひとりに対する支援のあり方。

小学校3年生 実践研究事例

友達と楽しく関わることのできる児童の育成

1 実践のねらい

私は、「友達と楽しく関わることのできる児童」を育てたい。私が考える「友達と楽しく関わることのできる児童」とは、活動するとき、孤立したり、特定の児童とだけ関わったりするのではなく、さまざまな児童とかわり合い、活動を楽しむことのできる児童のことである。

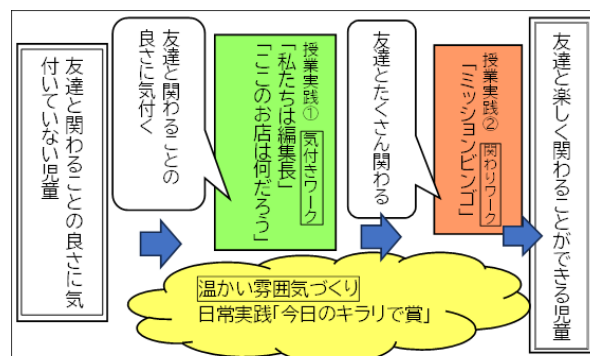
本学級は、何事にも真面目に取り組むことができ、友達に優しく、活動に一生懸命取り組もうとする児童が多い。しかし、ペアやグループの活動になると、特定の友達以外とは関わろうとしなかったり、お互いにあまり話をせず、グループが気まずい雰囲気のまま活動を終えてしまったりすることがある。

生活アンケートを取ると、学年に仲のよい友達がいると回答した児童が81%だったのに対し、学級に仲のよい友達がいると回答した児童は52%だった。また、どの友達とも楽しく関われるかという質問に、関われると回答した児童は44%だった。このことから児童は、友達と関わる経験が少ないため、その良さに気付いていないことが分かった。そのため、友達と関わることで気まずい関係になってしまうことを恐れて、自分から友達と関わろうとすることがお互いにできず、友達を自ら遠ざけてしまっているのだと考えた。

そこで、まずは安心して友達と関われる雰囲気をつくりたい。そして、さまざまな友達と関わる良さや、たくさん関わる良さに気付き、友達と関わることは楽しいことだと思うようにしていきたいと考える。

2 実践のすすめ方(対象児童 3年生27名)

はじめに、安心して友達と関われるようにするためには、温かい雰囲気づくりが必要だと考え、日常実践「今日のキラリで賞」を行う。次に、気付きワーク「私たちは編集長」「ここのお店は何だろう」を行い、友達と協力しながら活動す



ることの楽しさと達成感を味わい、友達と関わることの良さに気付けるようにする。最後に、「ミッションビンゴ」の実践を行い、さらに多くの友達との活動を通して、関わることの良さを実感し、友達と楽しく関わるができる児童を育てたいと考える。

3 実践の内容

日常実践 「今日のキラリで賞」【5月～】

(1) ねらい

友達のよいところを見付けて発表することで、認め合いの気持ちを高めることができる。

(2) 実践の方法

- ① その日の日直が、友達のよい行動・言動（「すごいね」「ありがとう」「がんばっているね」などという言葉にあてはまると思ったこと）を見付け、「ミニ賞状」に書く。
- ② 帰りの会の際にみんなの前で発表し、「ミニ賞状」を手渡しする。
- ③ 発表後に学級みんなで拍手をし、その児童と発表した児童を称賛する。

留意点

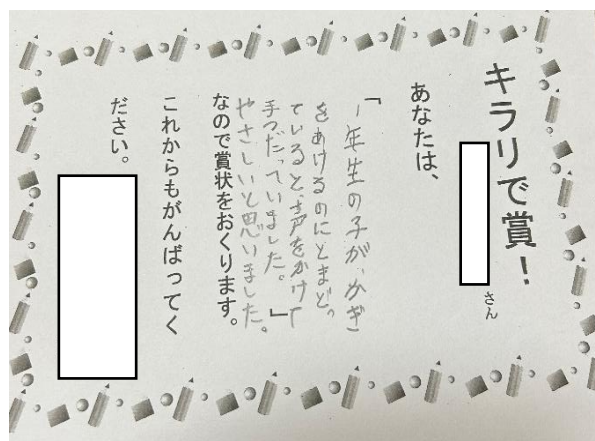
内容の幅が広がるように、また賞状をもらえないという児童がいないように、教員が定期的にさまざまな場面のよい行動や言動を見付け、発表する。また、友達が発表した内容は否定せず、受け入れ、称賛することの大切さを伝える。

(3) 実践の内容

活動の説明をした後、教員が見本として、「黒板を消すのを手伝ってくれてうれしかった」「学級委員の仕事をがんばっていてすごい」という内容の賞状を発表し、児童に手渡した。もらった児童、それを見ていた児童みんなが笑顔になり、「楽しそう！早く賞状を書きたい！」と意欲的に友達のよいところを見付けはじめる姿が見られた。

しばらく実践を行っていると、さまざまな場面で友達のよいところを見付け発表することができるようになった。1年生が困っているときに声を掛けている場面を賞状に書いて発表すると、もらった児童は、「見てくれている人がいるのはうれしい」と、自分のがんばりを周りが評価してくれることに嬉し

さを感じている様子が見られた。また、自分も同じようによいところを見付けたいと「先生、家に持って帰って賞状を書いてもいいですか？」「一度に何枚か賞状を書いて発表してもいいですか？」と意欲的に活動に取り組む姿や、日直ではないが発表したいという児童の姿も見られ、学級の雰囲気はとてもよいものになっていった。



児童が書いた「キラリ賞」

よかったことは、キラリしょうをもらってとてもうれしかったです。きづいたことは、キラリしょうをもらったときってみんなにうれしかったんだってきづきました。もっとキラリしょうをもっともっとかいてみたいなあと思いました。

児童が書いた「キラリ賞」の感想

(1) ねらい

友達と協力して活動に取り組むうれしさや楽しさを味わい、友達と関わることの良さに気付くことができる。

(2) 実践の方法

- ① 4人グループにイラストの描かれたカードを5枚（一人一枚と、5人で共有できるカード一枚）を配り、みんなでつなげて一つのオリジナルストーリーを完成させる。

- ② ルールを確認する。

ルール1 配られたカードは、5人で共有するカードと自分のもの以外は見えてはいけない。

ルール2 話し合う際、メモをとってはいけない。

- ③ 意見を聞くことを意識し、グループで協力して取り組むことを確認する。

- ④ 振り返りを行い、よかったことや気付いたことを話し合う。

留意点

絵をつなげる際、話がつながっていればどの並びでも間違いではないことを伝え、みんなで話し合い、話をつなげることを意識させるようにする。

(3) 実践の内容

活動の説明をすると、「難しそう」「どうしたらいいのかな」と不安そうにし、なかなか話し合いが進まないグループがあった。そこで、まずはみんなで話し合っ、それぞれがどんなカードを持っているかを聞くとよいことを伝えた。すると、それぞれのグループのやり方で順番に、自分のカードにどんな絵が描かれているかを一生懸命説明する姿が見られはじめた。

話し合いがすすむにつれて、「〇〇さんの絵の様子から、こっちの方が面白そうじゃない！」「それいいね！そうしよう！」と、意見を出し、それを聞いて、楽しくストーリーを話し合う姿が見られた。どんなストーリーになったか確認する時間では、「おおピッタリだね！」や「思っていたのと少し違うけど、いいね！」と自分たちや他のグループが完成させたストーリーを見て、みんなで楽しむことができた。

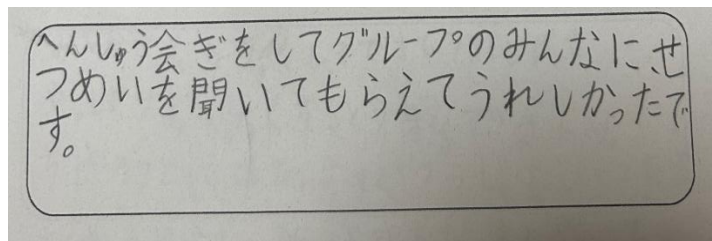
活動の振り返りでは、「みんなで話し合っ、楽しかった」「みんなに説明を聞いてもらえてうれしかった」と、活動を通して、自分の意見を聞いてもらえることのうれしさや、友達と活動することの楽しさを感じることができた様子だった。

(4) 成果と課題

- 友達に自分の意見を聞いてもらえることのうれしさに気付くことができた。
- 友達と話し合ったり、一緒に考えたりすることは楽しいと思うことができた。
- 意見を聞くことに意識をむけ過ぎてしまい、自分の意見をあまり言えなかった児童がいた。



自分のカードに描かれている絵を説明する児童



児童が書いた「私たちは編集長」の振り返り

(1) ねらい

友達と協力して話し合う活動に取り組み、友達と関わることの良さに気付くことができる。

(2) 実践の方法

① 4人グループになり、お店がならんでいる白地図と、情報カードを1セット配り、話し合っ

て白地図にお店の名前を正しい並びで埋めていく。

② ルールを確認する。
ルール1 情報カードはグループで一人ひとりの枚数が均等になるように配り、自分のカード以外は見

てはいけない。
ルール2 グループの情報をもとに地図を埋めるが、話し合う際メモを取ってはい

けない。
 ③ 意見を聞くこと、意見を出すこと、意見をまとめることを意識し、グループで協力して取り組むことを確認する。

④ 振り返りを行い、よかったことや気付いたことを話し合う。

留意点

意見を聞くだけでなく、出すことやまとめることにも意識が向くようなワークシートを配布する。また、協力し、達成感を味わうことが目的のため、正解不正解にこだわり過ぎないように声掛けを行う。

(3) 実践の内容

「私たちは編集長」とは違うメンバーで活動を行った。前回の「私たちは編集長」の経験から、「気付きワーク」を行うことを伝えると多くの児童が喜びをあらわにしている様子が見られた。今回は活動の前に、意見を出すこと、意見を聞くこと、意見をまとめることの大切さを確認してから活動に取り組んだ。

活動が始まるとどのグループも、「私まとめ役するね」「ぼくは話し合いをすすめるね。〇〇さんからどんなカードがあるか言っていこう。」と、役割分担をしているグループが多く、みんなで話し合っ

て活動すすめている様子が見られた。また、「私たちは編集長」と比べると内容が難しいので、児童は頭をひねらせながらも多くの意見を交わしていた。

答え合わせの時間では、正解したグループはみんなで喜び合い、間違っていたグループはみんなで悔しそうな表情浮かべていた。しかし、誰かを責める様子はなく、「〇〇さんの言っていたことが正しかったね！ごめんね」「全然いいよ！」という会話が聞こえてきて、悔し

ながらも、どこか楽しそうな様子が伝わってきた。

振り返りでは、「みんなで協力したから正解することができた。とても楽しかった」「間違ってしまったけど、みんなと楽しくできてよかった」と、みんなで協力すること

	しつもん	名前
1	たくさん意見を出したのはだれですか？	
2	みんなの意見を聞いてくれたのはだれですか？	
3	みんなの意見をまとめようとしたのはだれですか？	

意見を出すことやまとめることに意識が向くワークシート

で活動が楽しくなることに気付けた児童が多くいたように思う。また、意見を出した人、意見を聞いた人、意見をまとめた人を振り返る時間では、「グループ全員を書いてもいいですか？」や「自分を書いてもいいですか？」と質問する児童もいて、多くの児童がそれぞれを意識して話し合いを行うことができた。

みんなと協力できてよかった。むずかしかったけどみんなが意見を聞いてくれたりまとめたりしてくれたからうれしかった。

児童が書いた「このお店は何だろう」の振り返り

(4) 成果と課題

- 多くの児童が協力することを意識して活動に取り組み、活動を楽しむことができた。
- 正解にこだわるよりも、友達と協力して活動できたことへの楽しさやうれしさを味わうことができ、友達と関わることの良さに気付くことができた。
- 活動内容が難しかったため、不正解のグループが多かった。達成感をより味わうには、もう少し解きやすくする必要があった。
- 授業内では楽しく友達と関わる様子が見られたが、日常生活では、授業ほどさまざまな友達と関わる姿は見られていない。

授業実践3 「ミッションビンゴ」 【7月】

(1) ねらい

さまざまな友達と関わり、楽しさや良さを実感することで、友達と関わりたいという気持ちを高めることができる。

(2) 実践の方法

- ① 毎朝、一人ひとりに違うビンゴカードを配る。ビンゴカードには、ランダムに出席番号の書かれている自分のビンゴカードと、本日のミッションを確認する。
- ② 休み時間や空いた時間を利用して、自分のビンゴカードに書かれた番号の人とミッションを行い、クリアできたら丸を付け、多くのビンゴをめざす。
- ③ ビンゴが、できたら、「絆メーター」にシールを貼り、たくさんの人と関わることの気持ち良さと達成感を味わう。

留意点

出席番号の男女比や、その日、必ず話しやすい人を数人カードに書くように配慮するため、いつ、誰のカードに誰を書いたかをチェックしておく。また、真ん中は教員にし、必ず一回はミッションがクリアできるようにする。

朝の会の5分間と、休み時間に取り組むことを伝え、声を掛けられたら快く応じるように約束した。

ミッションビンゴ！

名前()

☆ 友達と協力して、今日のミッションをクリアし、たくさんビンゴしよう！

☆ たて、横、ななめで一列全部の友達とミッションクリアしたらビンゴ！

☆ ビンゴした数を、クラスのキズナメーターにためていこう。たくさんのキズナがたまるといいね！

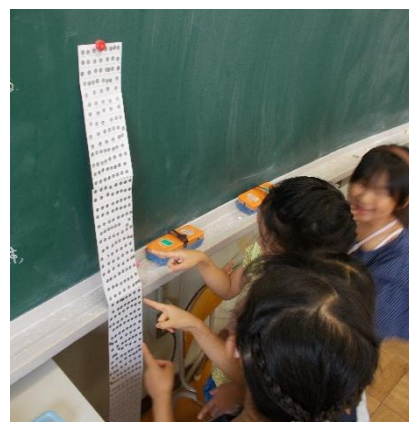
今日のミッション

「 友達の休みを調査しよう 」

	先生	

ビンゴの数()

ミッションが書かれたビンゴカード



「絆メーター」を見て、喜ぶ児童

(3) 実践の内容

実践初日、活動の説明をすると、「楽しそう！」と、活動にわくわくする児童の姿が見られた。初めのミッションは、ゲーム感覚でできる楽しい活動を設定し、児童が楽しく活動できるようにした。ビンゴカードを配ると「〇〇さんとだ！」と誰と活動するか楽しそうに確認し、どの児童も自ら友達に声を掛けて活動を行う様子が見られた。

また、友達と協力し、楽しく関わることができる姿が「絆」であると児童と話し合い、1ビンゴ＝「1絆」であり、みんなで「絆メーター」を貯めようと伝え、より児童は張り切って活動に取り組み、楽しそうに「絆メーター」を貯める姿が見られた。

活動の回数を重ねる度に、「今日はどんなミッションかな!」「誰と活動できるかな?」と、誰とどんなミッションができるかを楽しみにする児童の姿が多く見られた。

振り返りでは、「これまであまり話したことがなかった友達とも仲良くなれた」「もっと友達と話したいと思った」と、これからもさまざまな友達と関わりたいと思うことができた様子だった。

やってみたかったことはもっとミッションビンゴを
やりたかったなあと思っただことですか？
まあ、みんなともなかよくがんばれたきもち
になれてとてもうれしかったです。
ことはみんなと、なかよくするのばうな
たいせつなんだなと思いました。

児童が書いた「ミッションビンゴ」の振り返り

(4) 成果と課題

- 毎日、さまざまな友達と楽しく活動することで、もっと友達と関わりたいという気持ちをもつことができた。
- 「絆メーター」をつくったことで、自分達の仲が深まっていると捉えやすくなった。
- 休み時間は友達と外に出掛けてしまうため、ミッションがなかなかできない児童もいた。

4 まとめ

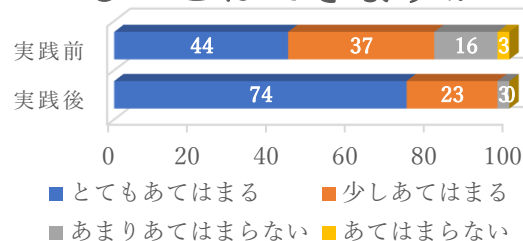
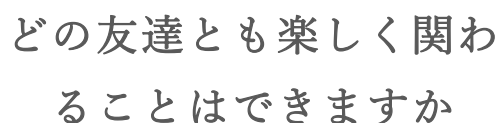
グループ活動で孤立する児童や、特定の友達としか話さない児童はあまり見かけなくなった。また、係活動や、席替えで隣になった友達など、不規則に組まれた友達どうしても、楽しく活動する姿が見られるようになった。

再び、アンケートを児童に行った。学級に仲がよい友達はいますかという質問に、52%→96%、という結果だった。さらに、どの友達とも楽しく関わることができるかという質問では、実践前と比べてあまりあてはまらない、あてはまらないと答えた児童が減った。このことから今回の実践を通して児童は、協力したり、声を掛け合ったり、さまざまな友達と楽しく関わり、それが、自分にとっても友達にとってもよい事であると気付くことができたのではないだろうか。

どの友達とも楽しく関わることはできますか

時期	はい (Blue)	どちらでもない (Orange)	あてはまらない (Gray)	その他 (Yellow)
実践前	44	37	16	3
実践後	74	23	3	0

7月、ある児童が私のところへやってきて、「先生、夏休みが本当は嫌なんです。みんないろいろなことをやって、すごく楽しかったから、もっと一緒にいたいです。」と教えてくれた。すると周りにいた児童も「そうそう!」と共感し、口々に1学期の思い出を話し合いはじめた。友達と関わって楽しいという思いが聞けたこと、そしてそれを友達どうしで共有し、共感し合っていることがなによりうれしかった。2学期も、児童どうしがたくさん関わり合い、みんなで活動すると楽しいという経験を積み重ね、「友達と楽しく関わってよかった」と思える児童を一人でも多く増やしていけるように、実践を行っていききたい。



前向きな気持ちで行動することができる生徒の育成

1 実践のねらい

現在の子どもたちは、将来の夢や希望を見出せず、悩んだり、苦しんだりしている。また、自分らしく生きることができる「居場所」が少なく、自分に自信をもてなく、前向きに行動しようとする気持ちも薄れている。このめまぐるしく変化する社会で、自分らしさを発揮しながら、仲間とともに困難な状況を乗り越えていくことが必要不可欠となっている。

わたくしが受けもつ中学校 1 年生は、明るく元気で楽しそうに学校生活を送ることができる。しかし、仲のよい生徒どうしで一緒に居ることが多かったり、行事以外では必要以上に級友とかかわろうとしなかったりする生徒もいる。これは、他者とかかわることが苦手だったり、小学校の頃の人間関係のもつれから不登校や登校渋りを経験し、他者と接する機会を自分から遠ざけてしまっていたりするなど、誰とでも上手に接することの大切さに気付かず、前向きな気持ちで行動することができないためであると考えた。

そこで、「生徒どうしのつながりを深める活動」と「自他のよさをいかして、働き掛け合う活動」を通して、前向きな気持ちで行動することができる生徒の育成を図りたいと考え、実践にとりくんだ。

2 実践の方法

(1) 対象 第 1 学年 3 組 30 人

(2) 基本的な考え

わたくしは、前向きな気持ちで行動することができる生徒を育成したい。前向きな気持ちで行動することができる生徒とは、生徒どうしによるつながりを深め、自他のよさをいかながら働き掛け合って行動することができる生徒であると考えた。

そこで、本実践では、「一年間、学級みんなで楽しい学校生活を送るためには、どうしていくとよいか」を一人ひとりに考えさせ、学級目標を考えさせる。学級目標を生徒どうしで決定させた後には、決定した学級目標の達成に近付いているかを日々の生活をふまえて定期的に振り返らせていく。

また、生徒どうしのつながりを深め、誰もが楽しく学校生活を送ることができるために、「みんなにあいさつ大作戦」を実施する。この実践では、あいさつをする習慣を身につけさせながら、生徒どうしのつながりの量を増やしていく。そして、あいさつには、「する人」と「返す人」の両方が存在することを意識させて、あいさつの質を高めていくことで、生徒どうしのつながりをさらに深めていくようにする。

次に、体育大会や合唱コンクールなどの学校行事では、「自他のよさに気付き、そのよさをいかして働き掛ける活動」を通して、一人ひとりに役割を与え、互いに認めたり、励ましたりしながら前向きな気持ちで行動することができるようにする。

3 実践の内容

1 生徒どうしのつながりを深める活動 「いろんな意味につながっているね」

学級目標を決めることは、学級全体で学級に対する思いや考え方を共有し、目標達成にむかって取り組むことで、生徒どうしのつながりが深まっていくと考えた。

そこで教員は、4月の最初の学活で生徒に「どんな学級にしたいか、どんな生活を送りたいか一人ひとりの思いを書いてみよう」と伝えた。すると、生徒たちは「楽しい学級にしたい」、「男女平等、SDGsを意識して



【資料2：班員で話し合っている様子】

いきたい」、「全力でやりたい」、「よいことをすると自分に返ってきて、幸せの輪がドンドン広がるようにしたい」、「出会いを大切にしたい」などとプリントに記述した。

その後、教員が「学級のためになる目標を考え、生活班で発表しよう」と伝えた。生徒たちの話し合いでは、「この学級目標はわかりやすいね」や「明るい感じがいいよね」など、楽しそうに取り組む様子がみられた。(資料2)生活班での話し合い後、班で一つずつ学級目標を決定し、黒板に書いた。(資料3)

1班	明るい笑顔で、全力で	2班	3組矢の如し
3班	S u n	4班	一日一善
5班	七転八起	6班	一期一会

【資料3：班で発表された学級目標】

この学級目標案をもとに、班の代表者が学級目標に込められている思いを発表したとき、Aが聞き間違えた発言から新しい学級目標が誕生し、多くの生徒から認められる場面があった。

B： 3組矢の如しは、光陰矢の如しから考えました。それは・・・

A： え！？コインランドリー！？

C： いいね、覚えやすいね。

B： ……(少し困った表情で)確かに覚えやすいけど、それってどういう意味になるのか教えてください。

A： 洗い終わった洗濯物のようなキレイな心をもつてことだよ。

D： 何かトラブルが起きても、水に流す、とかもあるね。

E： 清潔な教室を保つ、もありそうだね。

B： みんなの意見を聞くと「コインランドリー」っていろんな意味につながっているんだね。

この会話以外にも、「洗濯物を回すように、会話を回す」や「コインランドリーで物が落ちたとき、『落ちましたよ』と気遣いのできる人になる」といった内容が出された。Bは、新しい学級目標への理解を示していたが、少し困った様子であったため、教員は「Bの班、そして全部の班の発表を聞いて、決めるようにしよう。学級目標は、みんなのためになることが大切だよ」と伝えた。教員の話聞いた後、Bはみんなに「コインランドリー、いい響きだし、意味もわかりやすくていいかも」と共感する発言をした。全部の班が発表した後、「コインランドリー」も含めた7つの学級目標案から多数決を取ったところ、「コインランドリー」が学級目標に決まった。

今回の活動で決まった学級目標は、教員による「動機付け」はあったものの、生徒どうしで学級目標を考え、決定することができた。今後は「コインランドリー」に決まった学級目標通りに「キレイな心」をもち、「話し合える」仲間と、「気遣い」をしながら学校生

活を送ることができているかを定期的に振り返り、目標を達成しようとする過程の中で、生徒どうしのつながりを深めていきたい。

2 生徒どうしのつながりを深める活動 「あいさつするっていうのはどうかな？」

教員は学級目標を決めてから、学級の様子を常に見守っていたが、全員が学級目標を意識して行動しているようには見えなかった。そのため、学級目標通りの生活を送るには何が必要なのかをみんなで話し合った。

教員： みんな、学級目標を意識して生活しているか、少し心配しています。
B： 先生、「コインランドリー」のようにやってるよ。
C： 僕たちの心は、とてもきれいです！！
教員： うん、確かに。みんなの心はとてもきれいです！！
全員： （笑い声が聞こえる）
教員： でもさ、それ以外にあった学級目標の思いつて、何だったか思い出せる？
全員： （周りと話してざわついている）
D： 明るく、楽しくだったような……
教員： （悲しそうな表情で…）仲間と話し合える、仲間に気遣いできる、だよ。

生徒は学級目標に込められている「話し合える仲間」「気遣いできる」という思いを意識しておらず、みんなが共有して行動していくことができていないと実感した。そこで、教員は、「目標達成のために必要なことは何だろう？」と問い掛け、「生徒どうしのつながりを高めていけば、目標達成に近づくよ。みんなができることを今一度考えてみよう」と伝え、生徒どうしで話し合うようにした。

E： 目標達成するために、「話し合える仲間」だと、具体的には何がありそう？
A： やっぱ、みんながかかわることがいいよね。
F： 「気遣いができる」だと？
F： う～ん、気遣いって考えると、（大分考えてから）あいさつするってのはどう？
C： おっ「あいさつ」することは、話し合うし、相手を気遣っていることにもつながるよね。

話し合いを終えた後に、教員は「みんな、いい気付きが増えたね」と生徒たちの話し合いの様子を笑顔で伝えた。そして、「今みんなが考えていることを書いてみよう」と伝えたところ、多くの生徒が目標達成にむけた考えを記述することができた。（資料4）

☆ みんなのために、自分で決めたこと ☆ できるだけ多くの人のかわりをつくること	☆ みんなのために、自分で決めたこと ☆ クラスみんなに積極的に声をかけること
☆ みんなのために、自分で決めたこと ☆ 自分からコミュニケーションをとれるようにがんばります。	☆ みんなのために、自分で決めたこと ☆ あいさつをきちんとする

【資料4：目標達成におけた生徒たちの記述】

今回の実践を通して、多くの生徒が生徒どうしのつながりを深めるために必要なことは何かを気付くことができたと考える。今後は、生徒が見つけた課題を改善し、学級、学校が楽しく、前向きな気持ちで行動することができるための「生徒どうしのつながりを深める活動」にさらにとりくんでいくことにした。

3 生徒どうしのつながりを深める活動 「よし、しっかりあいさつしていくよ!!」

実践2での話し合いの中で、生徒Bの発言である「あいさつ」に着目し、生徒どうしが

つながりをさらに深めることができるよう「みんなにあいさつ大作戦」を実施することにした。

校外学習が近付いた6月初旬の帰りの会で、教員は「あいさつカード」を配付してみんなと次のような話をした。

B： 「あいさつカード」??先生、これな～に??

教員： みんなのつながりをさらに深めたいと思ってね。

C： でも、なんであいさつなんですか？

教員： みんなが学級目標の振り返りで「あいさつをきちんとする」とか「積極的に話し掛ける」って書いたんだ。つながりを深めるためには会話という働き掛けが必要だということを自分たちで感じているんだよ。先生は、会話の第一歩はあいさつだと思うんだよね。

C： なるほど～。楽しそうだね。

D： やってみようよ。

生徒たちは、少し不安そうな様子であったが、いろんな生徒にあいさつをしたりあいさつをされたりする数が増えていく中で、楽しそうな表情でとりくんでいる様子が日に日に増していった。その結果は「あいさつした数」の平均値にも表れた。最初の日は平均値は3.96回であったが、次の日以降は、平均値が上がった。(資料5)

挨拶した数の平均値

6月	6日(月)	3.96回
	7日(火)	13.75回
	8日(水)	11.96回
	9日(木)	12.34回
	10日(金)	12.89回

【資料5：学級でのあいさつの平均値の様子】

また学級通信で毎日の結果を公表したり、教員の思いを書いたりしたことで、「あいさつの数が増えたね」や、「あの子めっちゃあいさつしてるもんね」などの会話が学級全体で聞かれるようになった。あいさつの量が増えたことから、今度はあいさつの質を高め、つながりをさらに深めるために、「あいさつ個票」を配布した。(資料6)

番号	6		
名前	C		
項目	あいさつした数	あいさつされた数	あいさつ返答率
6月6日	27	3	11%
6月7日	27	17	63%
6月8日	28	15	54%
6月9日	28	15	54%
6月10日	28	15	54%

【資料6：あいさつ個票(例：生徒C)】

教員： あいさつする人が増えて、先生はうれしいです。

全員： (うれしい表情を見せる)

教員： (何気なく)「あいさつ個票」を配付します。

全員： 何これ?「あいさつされた数」、「あいさつ返答率」って何?

教員： ふふっ、これはね～、あいさつがきちんと行われているかを確認するものです。もしかしたら、適当にあいさつをして、それを「あいさつした数」にカウントしていない!?

C： 俺ちゃんとしてるし。

教員： 「あいさつ返答率」で100%に近いか確認してみよう。生徒C、どうかな?

C： ……。(結果を見て苦笑い)

教員： あいさつはただ闇雲に「おはよう、おはよう。」って言えばいいってわけじゃないよね。あいさつをする、そして、あいさつが返される、これが本物のあいさつだよ。さらに、そこから会話がスタートすることができれば、お互いをもっと知ることができて、つながりは深まっていくよね。そんな、質の高いあいさつって、素敵じゃない?

C： そっか、その通りだね。よし、しっかりあいさつしていくよ!!

この話し合いの後、教員は生徒たちに「みんなにあいさつ大作戦」を実施している期間は、「毎日のあゆみ」を記入するよう説明した。また、「毎日のあゆみに書くのは、感想だけではなく、質の高いあいさつをするための工夫や級友との変化があったことを書くようにしよう」とも伝えた。

生徒たちは、「目を見てあいさつをする」、「名前を呼んでからあいさつをする」など「質の高いあいさつ」をするための工夫を記述していた。(資料7) また、「あまりしゃべらない人とあいさつができるのでなんか楽しいです」や、「今日も朝いろんな人があいさつしてくれてうれしかったです。また最近、あいさつが増えているから、みんなにあいさつ大作戦が終わっても続くようにしたいです」、「今まで話をしたことがなかった〇〇さんや△△さん、◎◎さんと、あいさつをしてから会話ができるようになりました」と記述している生徒がいた。(資料8)

またこの週は校外学習があったため、「校外学習で一緒になった人ともあいさつしたい」と記述する生徒もいた。教員は生徒の記述内容を学級通信に載せて配付したところ、生徒たちは学級のみんながどんな風にか書いているかを真剣に読んだり、周りの生徒とあいさつ大作戦の話をしたりする姿がみられた。(資料9)

また、今まであまり話したことのなかった校外学習の班員とあいさつをする様子が増えたり、「〇〇さん、おはよう。今日も一日がんばろうね」など、質の高いあいさつをしたことで、今までかわりなかった級友とも会話が始まったりする姿が多くみられた。この結果、この週の「あいさつした数」の平均値はすべての日で10回を超えていた。(資料10)

あいさつの量のみを意識した前の週とは異なり、質も意識したあいさつにしたことで、ある程度あいさつの数は減ると予想していた。しかし、前週の結果とほぼ変わらない数値が出たことに教員はうれしく感じた。これは、生徒が「みんなにあいさつ大作戦」を前向きにとりくんだ結果であったと考えられるからである。

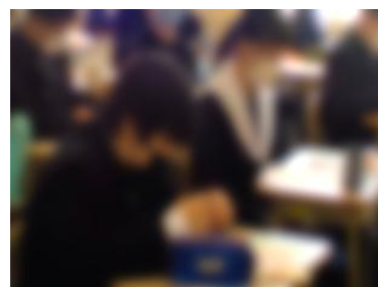
2週間実施した後に、「友情の深まりはどうか」のアンケートを取った。その結果、92.8%の生徒が友情の深まりがよくなっていると実感していることが分かった。

・とてもよくなった	14人	・まあまあよくなった	12人
・あまり変わらない	2人	・悪くなった	0人 (30人中28人回答)

しかし、一部の生徒は、「みんなにあいさつ大作戦をしているから、数を増やそうとあいさつしているように思えた」と記述していた。このことから、生徒どうしのつながりが深まっていると実感することができていない生徒もいることがわかった。そのため、生徒全員でつながりが深まっていると実感することができるよう、体育大会や合唱コンクール

【資料7：あいさつの質を高めるための記述】

【資料8：あいさつの質を高めるための記述】



【資料9：学級通信を真剣に読む生徒の様子】

2週目の学級平均	
13日(月)	13.10回
14日(火)	11.10回
15日(水)	14.86回
16日(木)	校外学習当日のため未実施
質の高い挨拶平均 11.67回	

【資料10：2週目のあいさつの平均値】

などの学校行事を活用して「自他のよさに気づき、そのよさをいかして、周りを認めたり、励ましたりしていく実践が必要だと考えた。

4 自他のよさをいかして働き掛け合う活動 「つながろう体育大会」

「みんなにあいさつ大作戦」では、級友とつながるきっかけをつくることはできたが、つながりを深めるまでには至らなかった。そこで、自他のよさに気づき、そのよさをいかなしながら、つながりを深めることができる「つながろう体育大会」を実施することにした。

- 教員： もうすぐ体育大会が開催されます。あなたたちは、どのような気持ちで体育大会にのぞみますか？
- A： 絶対に優勝したい！！
- B： でも、あのクラスには勝てないよ。
- C： そんなのやってみないとわかんないじゃん！！
- D： でも、俺らってそんなに運動、得意じゃなくない！？
- 教員： ありがとう。そうなんだよ。30人もいるんだから、運動が得意な仲間もいれば、あまり得意じゃない仲間もいるよね。
- B： そうだよ。楽しくできりゃよくない！？
- E： 順位なんて気にせず、とりあえずがんばるってどう！？
- F： それじゃ、3位以内をめざしてみたら！？

この後の話し合いで、学級全体で「勝つことよりも楽しむことを優先しよう」と決まった。そこで担任は、もう一度学級全体に問い掛けた。

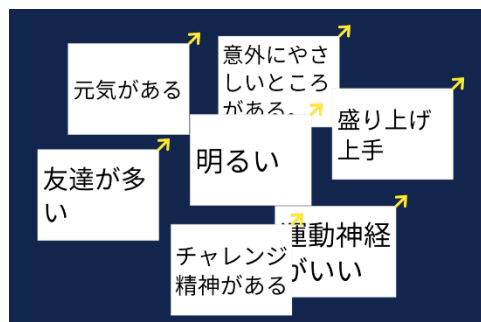
- 教員： もう一度聞くけど、楽しむって、どういうこと！？
- E： みんなで応援したり、協力したりして、誰かが嫌な思いをしないことです。
- F： そういえば、生徒Eさんに応援されてうれしかったことがあります！
- G： わたしが困っているときに、声を掛けてくれたのは生徒Aさんでした！
- 教員： 仲間を励ますことができるのは、とても大事なことだね。
- 全員： （うんうんとうなずく）
- 教員： わかりました。みんながそれぞれのよさをいかせる体育大会になったら、みんな
- のめざす体育大会になるんじゃないですか？
- B： そうか、楽しく体育大会をやるってそういうことか！

この話し合いにより、楽しい体育大会にするということは、一人ひとりのよさをいかして協力することだということがわかった。しかし、自分のよさを知らない生徒がいることもわかったため、級友から自分のよさを教えてもらう活動「ICTでつながろう」を設定することにした。

「ICTでつながろう」では、ロイロノートスクールの生徒間通信を活用して、生徒どうしで、互いのよさをテキストで送り合った。（資料11）

生徒たちは、「私って、こんなにいいところがあるんだ」や「自分のことをやさしいとは、思っていなかった」など、たくさんの自分のよさに気付くことができていた。このよさを発揮できる体育大会での種目決めを生徒どうしで話し合った。【資料11：級友から届いた自分のよさ】

数日後から、体育の授業で体育大会の種目別練習が始まった。練習では、級友のよさや工夫に対して、認めたり励まし合ったりする様子がみられた。



- A： 私がリレーの練習をしている時に、生徒Bが声を出して応援してくれていて、とてもうれしかった！
- C： 生徒Dも、一緒に応援していたね！
- B： 生徒Fは、たくさんの人に走り方をアドバイスしていたよ！
- D： 楽しく練習するって、こういうことか！

目標は達成できなかったが、生徒は充実した顔で体育大会を終えた。体育大会の振り返りを書かせるころ、多くの生徒が「応援する側もととても盛り上がって、楽しめました」や、「全員で協力して、がんばったからとてもよい思い出になりました」、「学級の一体感が楽しかった」と好意的な記述をしていた。また、「すごく速かったよ」、「がんばってたね」などの級友の声掛けがうれしかったとも記述した。Dの感想では、「お互いを褒め合ったりして、もっとなかなくなれました」など、級友どうしで認め合いながら練習や本番にとりくめていたことがわかった。(資料 12)

2. 400mリレーがわかって33人とお互いを
ほめあたりしてもっと仲良くなれました。
最初は体育大会つかえるからやたなつて思
いたけど、体育大会はすごく楽しい。友達も
仲良くなれていい事ばかりでした。クラスの
結果から位以内にはなれなかったけど、クラス
のみんなが一つになって応援したり競技を
一生懸命がんばったりして盛り上げたので
よかったです。クラスがより仲良くなり
なれた楽しい体育大会でした。

【資料 12：認め合いのよさを実感する
生徒 D の記述】

実践後に、「クラスには、いい人だなと思う友だちや、すごいなと思う友だちはいますか」というアンケートを取った。その結果、「とても思う」が 22 人(75.9%)、「まあまあ思う」が 5 人(17.2%)、「あまり思わない」が 2 人(6.9%)、「思わない」が 0 人(0%)となった。

また、実践の前後の「あなたは、運動や勉強、係活動や委員会活動、趣味などでクラスから認められていることがありますか」というアンケート結果を実践の前後で比較すると、右記の結果になった。(資料 13)

	実践前(28人)		実践後(29人)	
とても思う	3	10.7%	5	17.2%
まあまあ思う	11	39.2%	13	44.8%
あまり思わない	13	46.4%	8	27.5%
思わない	1	3.5%	3	10.3%

【資料 13：実践前、実践後のアンケート比較】

このことから、実践を通して、友だちのよさを認められる生徒や、自分のよさを認められたと実感している生徒が増えていることがわかった。

しかし、認められたとまったく感じていない生徒が 1 人から 3 人に増加していることから、学級全員が参加できる認め合い活動を行う必要があると感じた。

4 おわりに

本実践の期間中、わたくしが新型コロナウイルス感染症感染者との濃厚接触者となり、出勤できない状況があった。後日、出勤すると学年の教職員から「3組の生徒たちがあいさつ活動をとりに来ていましたよ」という報告があった。すぐに生徒に聞いてみると、「みんなで話し合って『みんなにあいさつ大作戦』をやろうと決めました」と話してくれた。また、自然にあいさつする生徒が増え、「3組の生徒はよくあいさつをしてくれるので、授業が気持ちよく始められます」と他の教員から言われたり、係以外の生徒が、配係や掲示係の生徒を手伝ったりするなど、あいさつだけにとどまらず、学校生活にも前向きにとりくんでいる様子がよくみられるようになった。

しかし、課題としては、学級全員が参加できる認め合い活動ができていなかったため、生徒どうしのつながりがまだ十分に深まっていないと感じている生徒が一部いることである。

現在、11月に行われる合唱コンクールにむけて学級全体で合唱練習にとりくんでいる。合唱練習では、一人ひとりが役割を担うことで、全員が責任をもって役割を果たせるようにし

ている。ここでも認め合い活動を実践しているため、合唱コンクールでは、より多くの生徒が、前向きに行動することができるようになると考えている。今後も前向きな気持ちで行動することができる生徒の育成にむけて、自己研鑽に励んでいきたい。

Ⅳ おわりに

1 明らかになったこと

現在の子どもたちは、自分の力を十分に発揮する機会が失われたり、将来の夢や希望を見いだすことができなくなったりしている。また、不登校問題やいじめの問題も増加傾向である。このような課題を克服するために、自治的諸活動と生活指導部会では、「たくましく生きる子どもを育てよう」をテーマに実践研究にとりくんできた。また、「協働を通じた人とのかかわりや学びへの追求」についても検討を重ねてきた。その結果、以下のような重要性が明らかになった。

- 子どもの気持ちの背景にあるものや発達段階をふまえ、実態を正しく把握したうえで活動内容を考え、子どものやる気を引き出す支援を行っていくこと。
- 地域と学校間の連携をふまえて、集団の質を高めるための活動を行っていくこと。
- 集団生活の中で、子どもどうしのかかわりを大切にし、リーダーの育成や集団の質を高める支援を行っていくこと。
- 問題行動の解決や予防をはかるために、家庭や地域との連携を大切にしたり、子どものコミュニケーション能力を育成したりしていくこと。

以上のことから、教員は子どもたちが将来たくましく生きる姿を見据えて、子ども一人ひとりの気持ちを考え、実態にあった働きかけを行っていくことが重要であることを確認することができた。

2 来年度への課題

本年度の自治的諸活動と生活指導部会では、たくましく生きる子どもを育てるために学習タブレットを活用したものや、学級力を高める取り組み、多様性を考えた関係諸機関と連携した取り組みなど、多岐に渡るものであった。

今後も子どもが成長しながら歩み続けることと同じように、教員も成長の歩みを止めることなく研究と実践にむけて研鑽に励んでいくことが必要だと考える。

次年度のレポートについては、本年度のレポートで課題となった、「子どもの実態を正しく把握した活動内容のあり方」、「集団の質を高める支援のあり方」、「問題行動の解決や予防をするために家庭・地域との連携とその支援のあり方」などについて、子どもたちがたくましく、そして安心・安全に生きていくことができるよう、日々子どもたちのことを考えたねばり強い取り組みが期待される。

最後に、正会員の方々および、お取り組みいただいた各分会・各単組の方々に、紙面をお借りしてお礼を申し上げるとともに、ここに掲載した小中学校の実践研究例を「たくましく生きる子どもを育てる」ためのご参考にしていただければ幸いである。

課題を自分事として捉え、他者と協働し、よりよい学級をめざす生徒の育成**1 実践のねらい**

本学級の生徒は、4 月当初から継続して、チャイム前着席やロッカーの整理整頓を意識するなど、規範意識の高い生徒が多い。しかし、それらと呼ばかける生徒は一部に限られ、他の生徒は言われたことを行う、受け身な印象を受ける。生徒が「自分たちでよりよい学級を築きたい！」と学級の課題を見つけ、課題解決にむけて話し合い、改善していくことが、自主性を育み、集団への所属感や連帯感を深める。それが学級力の向上へとつながると考えた。

めざす学級像に迫り、学級力を向上させていくために、学級力アンケートを定期的に行い、学級力レーダーチャートを作成する。そのレーダーチャートから、よりよい学級をめざし、課題解決のための方策や次の学級目標を決める話し合いを行っていく。そのために話し合い活動を充実させていきたい。学級の思いをまとめ（合意形成）、活動目標を決めることで、課題を自分事としてとらえ、他者と協働し、よりよい学級をめざす生徒を育成できるのではないかと考え、実践にとりくんだ。

2 実践の方法**(1) 対象 第 1 学年 1 組 35 人****(2) 基本的な考え**

わたくしは、課題を自分事としてとらえ、他者と協働し、よりよい学級をめざす生徒を育成したい。課題を自分事としてとらえ、学級力を向上させていくためには、学級の現状を知ることが必要不可欠である。そこで本実践では、学級力アンケートを定期的に行い、学級力レーダーチャートを作成する。そのレーダーチャートからよりよい学級をめざし、課題解決のための方策など、話し合いを行っていく。話し合いでは合意形成の手法を取り入れる。互いの意見を理解し合い、最適解・納得解を求めていく。日々の生活はもちろん、話し合いでも他者と協働することを意識できるようにしたい。学級の思いをまとめ、取り組む目標を決め、その目標を達成するために自ら行動したり、他者と協働したりする経験を重ねていく。その経験を通して、学級のことが好きになり、学級の役に立ちたいという思いを強くし、その思いを自ら積極的に行動に移すことができるようにする。

抽出生徒 A について述べる。A は自分の考えを積極的に伝えたり、チャイム前着席の声かけを自ら行ったりするなど、学級のために行動することができる。しかし、自分の考えに固執してしまい、周りの意見を上手に受け入れられないことがある。合意形成をはかった話し合い活動を取り入れ、自分の思考の幅を広げたり、深めたりしてほしい。そして、学級の課題を自分事としてとらえ、級友と協働し、よりよい学級を築いてほしい。学級力向上のリーダーとして活躍してほしいと考える。

3 実践の内容**1 学級の実態に即した「レーダーチャート」の活用****(1) 生徒の思いを中心に学級目標を考える**

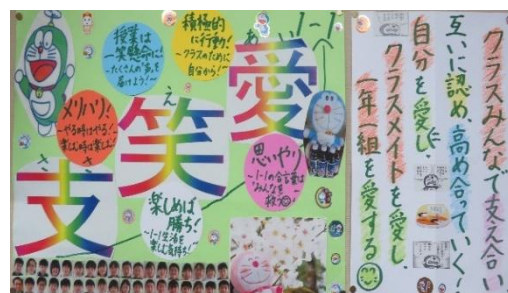
1 年 1 組での生活がスタートした入学式の日、生徒に「クラス全員が、1 年 1 組で楽しく充実した時間を過ごせるクラス」を築いていきたいと話をした。そのため特に、めりはりをつけて生活すること、全員が 1 - 1 生活を乐しもうという思いをもつこと、自ら学級のために行動することを大切にしてほしいと伝えた。しかし、これだけでは教員の思い中

心の学級づくりになってしまう。そこで、4月中旬に級訓決めを行った。級訓決めでは、一人ひとりのめざす学級像を、全体でめざす学級像へ結びつけるため、板書をする際に、マッピングを用いて、生徒の思いが級訓に込められるようにした。「やるときはやる、楽しむときは楽しむ、めりはりのあるクラス」、「チャイム前着席、整理整頓が当たり前ができるクラス」、「授業でたくさん発言できるクラス」、「支え合って生活していきたいから『支え合い』はどうか」、「笑顔と愛があふれるという意味も含めて『支笑愛』、話し合いの結果、級訓は「支笑愛」に決まった【資料1】。また、級訓をより意識して生活できるように、マッピングをもとに学級みんなで一年間特に大切にしていきたいことについても話し合い、『1年1組・11か条』としてまとめ、教室に掲示した【資料2】。Aも「めりはりをつけて、チャイム前着席を意識したい」と発言するなど、自分の考えを積極的に伝えていた。また、学級三役（代議員）にも立候補し、学級を中心となってがんばっていこうという意思が感じられた。

(2) 「学級力アンケート」「レーダーチャート」を活用する

4月は特に、生徒たちがチャイム前着席と机上やロッカーの整理整頓を意識した。教員やAなどの声かけもあり、チャイム前着席は当たり前になり、ロッカーの整理整頓は学校一と自信をもてるまでになった。しかし、まだまだ教員主導の感が否めなかった。学級力向上のためには、「自分たちでよりよい学級を築きたい!」という思いで、生徒たち自身が学級の課題を見つけ、課題解決にむけて話し合い、改善していくことが大切である。4月下旬に、4月の生活を振り返り、5月の学級目標を決める話し

合いを行うことにした。その際、「学級力アンケート」を行った。学級力アンケートとは、現在の学級の状況を診断するためのアンケートである。そのアンケートをもとに、「学級力レーダーチャート」を作成した。学級力レーダーチャートとは、学級力アンケートの集計結果を領域別・項目別に可視化したレーダー型のグラフのことである。これらにもとづき、生徒自身が学級の実態について実感をもって受け止め、学級力向上にむけて、主体的な取り組みを行うことができる。また、この2つを用いることにより、学級の可視化が容易に可能となり、改善点や次の目標が決めやすくなるという利点もある。めざす学級像により迫り、学



【資料1】1年1組の級訓「支笑愛」



【資料2】

1年1組・11か条

1-1の強みを発掘・発揮! ~学級力向上プロジェクト~

学級力アンケート

1-1生活・4月ふり振り返り
~5月へむけて~

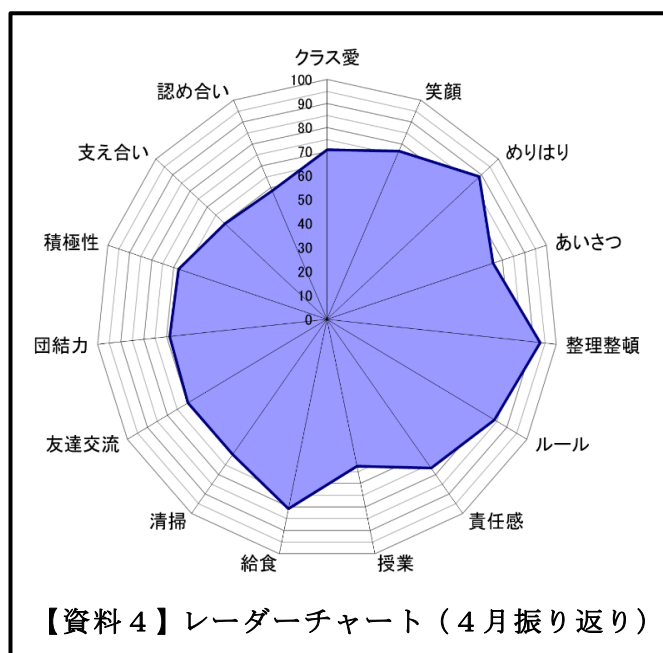
名前

◎ このアンケートは、1-1をより良いクラスにするためにみなさんと意見を出し合うものです。それぞれ項目の1~4の数字をあてはまるように、一つずつ○をつけましょう。
4:とてもあてはまる 3:少しあてはまる 2:あまりあてはまらない 1:まったくあてはまらない

①クラス愛	クラスみんなで決めた目標(「支笑愛」)に力を合わせて取り組んでいる学級です。	4-3-2-1
②笑顔	「1-1生活を楽しむ!」気持ちを大切にしている学級です。	4-3-2-1
③メリハリ	「やる時はやる、楽しむ時は楽しむ!」メリハリをつけて生活できる学級です。	4-3-2-1
④あいさつ	朝や授業の始めと終わりなど、元気にあいさつをすることのできる学級です。	4-3-2-1
⑤整理整頓	机やロッカーなど、整理整頓が④で美しい教室環境を維持できている学級です。	4-3-2-1
⑥ルール	クラスや学校で決められたルールをきちんと守る学級です。	4-3-2-1
⑦責任感	係や当番の活動に責任をもって取り組むことのできる学級です。	4-3-2-1
⑧授業	授業(話し合い)で、自分の考えを積極的に発言することのできる学級です。	4-3-2-1
⑨給食	給食の準備はだまってすばやく協力して行うことのできる学級です。	4-3-2-1
⑩清掃	清掃はだまって、丁寧に・真実に取り組むことのできる学級です。	4-3-2-1
⑪友達交流	たくさんのクラスメイトと楽しく交流ができていく学級です。	4-3-2-1
⑫団結力	生徒会で決めた学校行事や学級で決めた活動に団結して取り組んでいる学級です。	4-3-2-1
⑬積極性	自分たちからクラスのために積極的に行動できる学級です。	4-3-2-1
⑭支え合い	「みんなを助ける」を合言葉に、日々の1-1生活で支え合っている学級です。	4-3-2-1
⑮認め合い	クラスメイトのよいところやがんばりを認めて伝え合っている学級です。	4-3-2-1

【資料3】学級力アンケート

級力を向上させていくために、アンケートとレーダーチャートは既存のものに生徒の意見を取り入れ、学級の実態に即したものに改良した。【資料3】【資料4】。レーダーチャートをもとにした話し合いの結果、5月は「支え合い」を重点項目とし、学級みんなで支え合いを高めるために、他の係の仕事ですすんで手伝うなど、自分から学級のために行動していくことを共通認識した。学級の実態に即したレーダーチャートの活用は、「よりよい学級を築いていこう」という生徒たちの士気を高めた。ここから、「1-1の強みを発掘&発揮!『学級力向上プロジェクト』」の活動が



スタートした。Aは、朝や帰りのSTで「整理整頓は〇〇さんからも褒められたので、引き続き意識していきましょう」、「自分もだけど、配りものが多いときは配り係の手伝いができるといいと思いました」などと、学級力向上のため、級友に呼びかける姿が多くみられた。しかし、学級全体としてはグループや全体での話し合いが課題だと感じた。一部の生徒のみで話し合いが展開されている印象を受けたからである。

2 コンセンサス（合意形成）ゲーム

上述したグループや全体での話し合いという課題を解決するため、グループや全体での話し合いには、「合意形成」の手法を取り入れることにした。合意形成とは、話し合いの中で互いの意見を納得のいく形で一致させること、意思決定において相互の意見の一致をはかる過程のことをいう。合意形成をはかるためには、これまで以上に異なる意見を互いに理解し合った上で、合意点を見つけることが大切である。ただ話し合っているだけでは合意形成にはならない。

【資料5】「合意形成」のポイント

そこで、生徒に合意形成のポイントについて次のように示した【資料5】。また、すぐにレーダーチャートをもとにした話し合いなどで合意形成をはかることは難しいと感じたため、段階を踏んでいくことにした。そこで行ったのが「コンセンサスゲーム」ある。コンセンサスゲームとは、与えられた課題について、チームで協力しながら答えを見つけていくもので、合意形成について学ぶことのできるゲームである。「雪山での遭難」「砂漠からの脱出」など、多くのコンセンサスゲームにとりくんだ。個人で考えた後に、個人の考えをもち寄り、グループで合意形成をはか

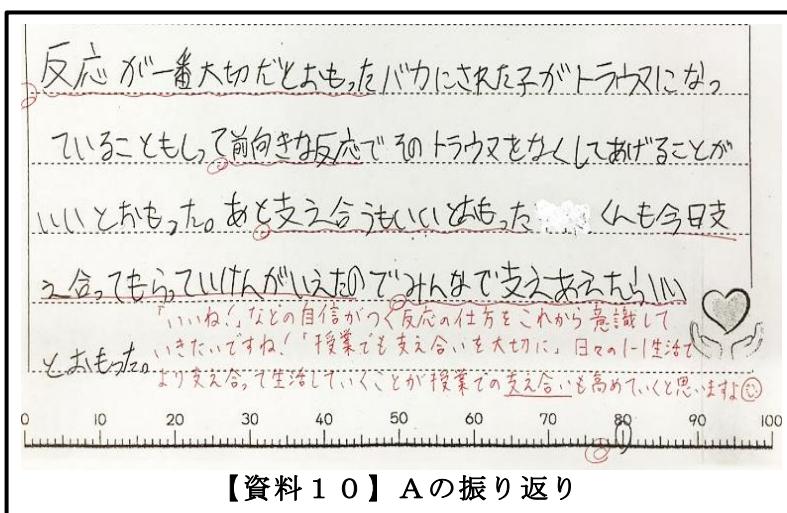
【資料6】コンセンサスゲーム「砂漠からの脱出」

合は、その理由を聞き、再度話し合いの時間を設けた。グループでの話し合い後、各グループの考えがまとめられたホワイトボードを提示した【資料 8】。また、生徒のタブレット端末にも写真を送った。グループでの話し合いから全体での話し合いへ移行しようとしたとき、Aから「立ち歩きがしたいです」という声が上がった。立ち歩きとは、グループから全体での話し合いへ移行する際に、課題について、他のグループの考えを把握したり、気になった点について生徒どうしで話し合ったりする時間である。各グループのホワイトボードをじっくり見る生徒、タブレット端末やワークシートを使って話し合う生徒など、さまざまであったが、「〇〇さんと同じ考えなんだ」と自分の考えに自信をもつなど、全体での話し合いで活発な意見交流、そして合意形成をはかっていくうえで、立ち歩きはよい時間であると感じた【資料 9】。その後、全体での話し合いを行い、合意形成をはかった。「1、6、7、8 班の考えが合意できて」「発言しやすい雰囲気をつくるための方法の一つは、『反応する』でいいと思いますが、みなさんはどう思いますか」など、Aをはじめ生徒たちで意見をつなぎ、活発に意見交流して合意形成をはかることができた。また、話し合いの終盤で生徒に納得度を聞いてみた。納得度は平均 85%と高い数値であった。本時では、『反応する』など、発言しやすい雰囲気をつくるための方法を学級みんなで考えることができた。



【資料 9】立ち歩きの様子

発言しやすい雰囲気をつくるための方法の一つは、『反応する』でいいと思いますが、みなさんはどう思いますか」など、Aをはじめ生徒たちで意見をつなぎ、活発に意見交流して合意形成をはかることができた。また、話し合いの終盤で生徒に納得度を聞いてみた。納得度は平均 85%と高い数値であった。

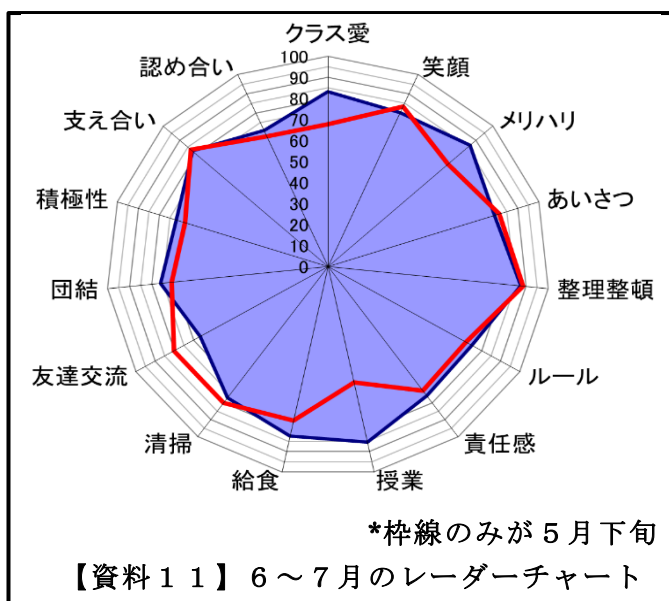


【資料 10】Aの振り返り

本時では、『反応する』など、発言しやすい雰囲気をつくるための方法を学級みんなで考えることができた。

この時間で、合意形成をはかることができたのは、コンセンサスゲームへの取り組み、グループから全体への段階を踏んだ合意形成などに加え、生徒一人ひとりが「日々の授業で発言しやすい雰囲気をつくっていき」と課題を自分事としてとらえていたことが、大きな要因だと考える。話し合いを経て、日々の授業では生徒の反応、つぶやきが格段に増えた。それと同時に発言する生徒も増え、授業に活気が生まれた【資料 10】。

【資料 11】は、6～7月を振り返ってのレーダーチャートである。5月に比べ、「授業」が高まったことはもちろん、数値が上がった項目がいくつかあった。グループや全体での話し合い活動を充実させたことで、生徒たちは話し合い活動だけではなく、以前より



【資料 11】6～7月のレーダーチャート

も給食の準備を協力したり、チャイム前着席の声をかけ合ったりするなど、日々の生活でもクラスメイトと協働し、よりよい学級をめざそうという生徒一人ひとりの意識を高めることができた。

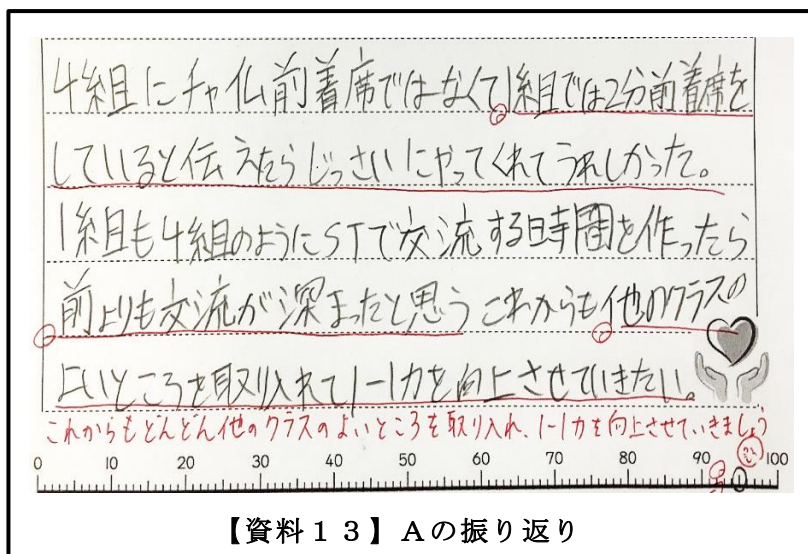
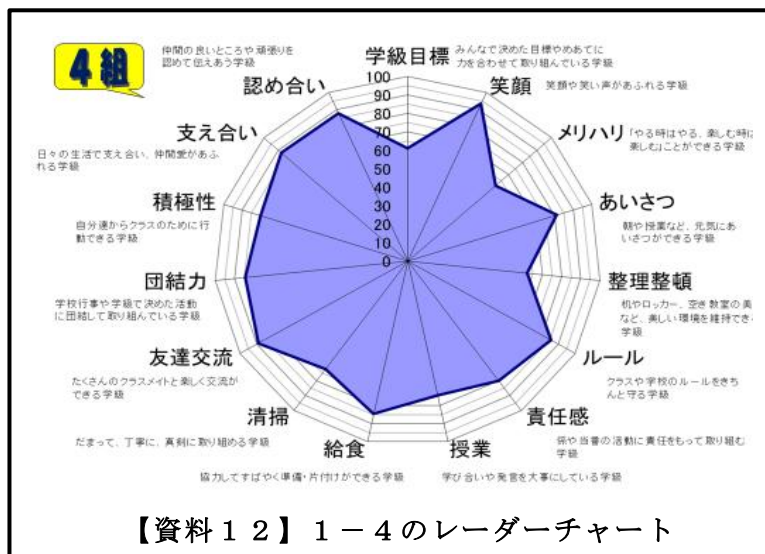
(3) 学年全体でのレーダーチャートへの取り組み

2学期に入り、Aは学級委員となり、学年の立案会長も務めることになった。立案会での取り組みを考える中で、Aは「1年生の全クラスでレーダーチャートを行っていくのはどうか」と提案した。1組で1学期の間、レーダーチャートをもとにした話し合いを通して、学級みんなで重点項目を決め、その重点項目を意識して生活したことで、学級力が向上したことを他の学級の学級委員に伝えると、みんなが賛同した。そこで、学年全体でレーダーチャートに取り組むことになった。学級力アンケートやレーダーチャートは、学年の実態に即したものに改良した。

そして11月に入り、学年集会で各学級のレーダーチャートを提示し、優れている点や改善点を発表する場を設けた。各学級のレーダーチャートの違いに驚きながらも、生徒たちは熱心にレーダーチャートを見たり、話を聞いたりしていた。中でもAが特に関心をもったのは、4組のレーダーチャートであった【資料12】。1組が高い数値を示している「めりはり」や「整理整頓」が4組は低く、

4組が高い数値を示している「友だち交流」や「認め合い」が1組は決して高いとはいえなかった。そこでAは自ら、4組の立案会メンバーにどうして「友だち交流」や「認め合い」が高い数値を示しているのかを聞いた。すると、朝や帰りのSTで1対1やグループで交流（トーク）する時間を設けたり、その交流する時間の中でクラスメイトや学級全体のよさをトークテーマにするなどして、認め合う機会をつくったりしていると聞いた。早速Aは1組でもSTで、グループなどで交流する時間を設けた。反対にAは、1組のめりはりや整理整頓、授業で意識している点について伝えた【資料13】。学年全体でレーダーチャートへとりくんだことで、Aをはじめ、生徒たちは学級の枠を超え、他学級とも協働し、よりよい学級、そしてよりよい学年をめざそうという意識を高めることができた。レーダーチャートの数値も「支え合い」、

「授業」をはじめ、全体的に高い数値を示した【資料14】。

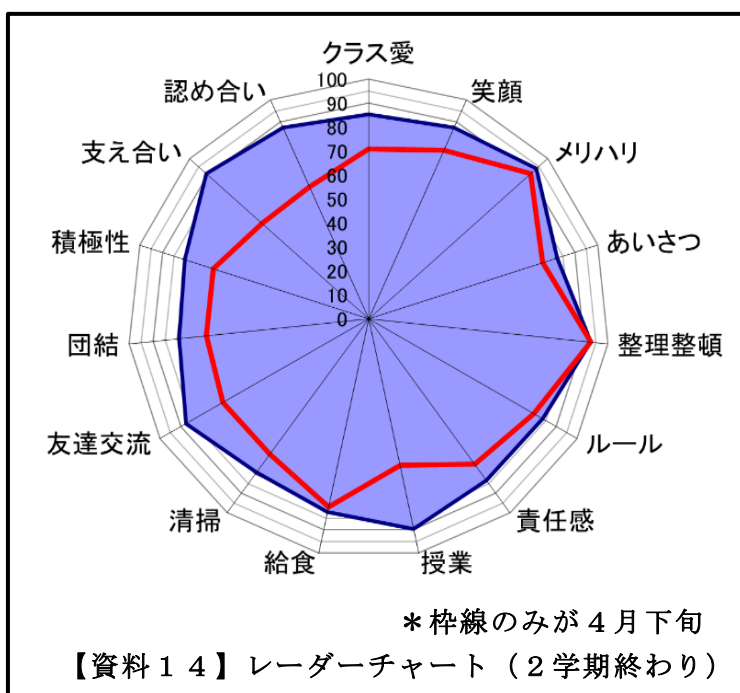


4 おわりに

級訓「支笑愛」や「1年1組・11か条」を教員の思い中心ではなく、マッピングを用いて、生徒の思いを中心に決めたことは、自分たちで考え、改善していけるしくみを構築する基盤となった。また、めざす学級像により迫り、学級力を向上させていくため、学級力アンケートとレーダーチャートを用いたこと。さらに、そのチャートに生徒の意見を取り入れ、既存のものから、学級の実態に即したものへ改良したことは、課題を自分事としてとらえ、よりよい学級をめざそうという意識をもつことにつながった。

Aも級友に「配りものが多いときは配り係の手伝いができるといいと思う」と呼びかけるなど、課題を自分事としてとらえるとともに、学級全体で学級力を向上させていきたいという意識をもつことができた。また、コンセンサスゲームを取り入れたことで、生徒は楽しみながら合意形成について学ぶことができた。また、合意形成をはかった話し合い活動を取り入れたことで、生徒はこれまで以上に異なる意見に関心をよせ、相手の立場に立って共感的に理解することができるようになった。さらに、グループから全体へと段階を踏んだ合意形成を取り入れたことで、課題について思考が深められ、活発な意見交流につながり、合意形成をはかることができた。話し合い中に納得度を問うことも、生徒の思いを可視化することができ、合意形成をはかる一助となった。グループや全体での話し合い活動を充実させたことで、めざす学級目標が明確になり、話し合い活動だけでなく、日々の生活でも他者と協働し、よりよい学級をめざそうという意識を高めることができた。Aも学級力向上のリーダーとして活躍することができた。そして、学級だけでなく、学年全体でレーダーチャートにとりくんだことで、学級の枠を超え、他クラスとも協働し、よりよい学級、そしてよりよい学年をめざそうという意識を高めることにつながった。この学級力向上プロジェクトを通して、生徒は学級のことが好きになり、学級の役に立ちたいという思いをもち、その思いを行動に移すことができた。1－1の学級力は大きく向上した。

しかし、課題もある。学級力アンケートは定期的に行うことも大切であるが、学級の現状をみて、アンケートや話し合いを行う時期を見極めることの必要性を感じた。決められた時期に形式的に行うだけでは受動的で、主体的とはいえない。生徒自らが「自分たちでよりよい学級を築きたい!」と主体的に取り組むためには、一週間ごとの学級目標を決めるなど、日々の継続した支援が大切だと感じた。また、納得度はポジショニング機能を使うことで、より生徒の思考の変化がみられると感じた。タブレット端末をもっと有効に活用できる可能性を探っていきたい。グループや全体での話し合い活動については、学級活動に限らず、日々の授業で継続的にとりくんでいきたい。それに加え、ワールドカフェなど、さまざまな話し合い活動を取り入れていくことが、話し合い活動の充実につながり、合意形成をはかるうえでも効果的であると感じた。そして、今後は学級だけでなく、学年の枠を超え、学級力はもちろん、学年・学校力が向上するような実践をしていきたい。



IV おわりに

1 明らかになったこと

現在の子どもたちは、自分の力を十分に発揮する機会が失われたり、将来の夢や希望を見いだすことができなくなったりしている。また、不登校問題やいじめの問題も増加傾向である。このような課題を克服するために、自治的諸活動と生活指導部会では、「たくましく生きる子どもを育てよう」をテーマに実践研究に取り組み、検討を重ねてきた。その

- 質の高い集団を作るために、学級で理想の姿を共有する機会や、自信がもてない子どものために子どもどうしのつながりをもたせるための支援を行っていくこと。
- 人間関係を広げていくために、学校生活のさまざまな場面で発達段階に応じた、互いを認め合う場を設定し、継続してとりくみを行っていくこと。
- 集団の質を高める活動についていけない子どもに対して、活動時の様子や振り返りの内容から一人ひとりの実態を把握し、個別の支援を行っていくこと。
- 問題行動の解決や予防を図るために、家庭や地域との連携を大切にしたり、子どものコミュニケーション能力を育成したりしていくこと。

結果、以下のような重要性が明らかになった。

以上のことから、教員は子どもたちが将来たくましく生きる姿を見据えて、子どもたち一人ひとりの気持ちを考え、実態を把握し、個に応じた働きかけを行っていくことが重要であることを確認することができた。

2 来年度への課題

本年度の自治的諸活動と生活指導部会では、たくましく生きる子どもを育てるために認め合い活動や学年交流、振り返りの結果明らかになった課題を主体的に解決していく取り組みや、多様な他者とのかかわりの中で自己指導能力の向上をめざす取り組みなど、多岐に渡るものであった。

今後も子どもが成長しながら歩み続けることと同じように、教員も成長の歩みを止めることなく研究と実践にむけて研鑽に励んでいくことが必要だと考える。

次年度のレポートについては、本年度のレポートで課題となった、「主体的で継続的な活動の取り組み方」、「リーダー育成や集団の質を高めるための活動のあり方」、「問題行動の解決や予防のための家庭・地域との連携、コミュニケーション能力の育成とその支援のあり方」などについて、子どもたちがたくましく、そして安心・安全に生きていくことができるよう、日々子どもたちのことを考えたねばり強い取り組みが期待される。

最後に、正会員の方々および、お取り組みいただいた各分会・各単組の方々に、紙面をお借りしてお礼を申し上げますとともに、ここに掲載した小中学校の実践研究例を「たくましく生きる子どもを育てる」ためのご参考にしていただければ幸いです。